

穴原遺跡

2003年

日田市教育委員会

序 文

穴原遺跡は昭和61年に調査を行い、縄文時代の遺跡が発掘されました。

この遺跡は市内でも数少ない縄文遺跡の一つで、当時の縄文人の生活の跡を偲ぶことができます。

本書が、文化財の保護や地域の歴史、学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、作業に従事いただきました地元の皆様方に対して、心から厚くお礼を申し上げます。

平成15年3月

日田市教育委員会

教育長 後 藤 元 晴



穴原遺跡（白丸）空中写真（東から）

例　　言

1. 本書は、日田市教育委員会が昭和61年度に実施した穴原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査では日田市土地開発公社の協力を得た。
3. 調査現場での実測、写真撮影は土居が行なった。
4. 本書に掲載した遺物実測は土居が行い、遺構・遺物の製図は藤野が行なった。
5. 遺物の写真撮影は、長谷川正美氏（雅企画有限会社）の撮影による。
6. 出土遺物および図面、写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
7. 図面の方位は磁北である。
8. 調査中は、宮内克巳氏（現、大分県立歴史博物館）の指導・助言を得た。
9. 本書の執筆・編集は土居が担当した。
10. 題字は、日田市文化財調査委員である武石邦男氏の揮毫による。



日田市の位置

本文目次

III	調査に至る経過と組織	1
1.	調査の経緯	1
2.	調査の組織	1
III	遺跡の立地と環境	2
III	調査の内容	3
1.	調査の概要	3
2.	基本層序	3
3.	1トレンチ	4
4.	2トレンチ	4
5.	3トレンチ	9
6.	4トレンチ	9
7.	表採遺物	9
IV	まとめ	9

挿図目次

第1図	日田市周辺の縄文遺跡分布図 (1/50,000)	2
第2図	トレンチ配置図 (1/1500)	3
第3図	1トレンチ遺物出土実測図 (1/40)	5
第4図	2トレンチ遺物出土実測図 (1/40)	6
第5図	3トレンチ遺物出土実測図 (1/40)	7
第6図	4トレンチ遺物出土実測図 (1/40)	7
第7図	出土土器実測図 (1/3)	7
第8図	出土石器実測図 (2/3)	8

表 目 次

第1表 出土土器観察表	10
第2表 出土石器観察表	10

写 真 図 版 目 次

巻頭図版	穴原遺跡空中写真
写真図版1	1~4 トレンチ
写真図版2	出土遺物



調査作業風景

I 調査に至る経過と組織

1. 調査の経緯

今回の調査原因となった光岡スポーツ広場新設事業及び農林業地域改善対策事業用地造成工事は、日田市大字友田字穴原2483-1ほか3筆の約2万haを対象とした② ソフトボール球技場と② 農業関連施設の造成・建設計画である。

こうした工事に先立つ昭和61年5月23日には、日田市土地開発公社事務局長名で埋蔵文化財の所在についての事前協議書が市教委に提出され、これを受けて市教委では埋蔵文化財の所在する可能性が高いことから、事前の試掘調査を行うこととした。

試掘調査は昭和61年6月9日から13日までの間実施し、その結果縄文時代の包含層が確認された。このため、再び遺跡の取り扱いについての協議を両者間で行い、現状保存が不可能なことから、記録保存のための発掘調査を実施することになった。

発掘調査は遺跡が対象地の全域におよぶものではなく、また工事着手までの時間的な余裕がないことから全面調査とはせずにトレンチ掘りにて実施することとした。発掘調査は6月24日から本格的に開始し、試掘調査結果に基づき合計4本のトレンチを設定した。調査は作業員による掘り下げ、測量、写真撮影等の作業を経て、7月25日には全日程を終えた。

2. 調査組織

発掘調査から報告書作成までの関係者は、以下のとおりである。なお、調査時の職名は、当時そのままとしている。

昭和61年度（1986年）／試掘調査・発掘調査

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 横原 芳彦（日田市教育委員会教育長）

調査事務 武石 邦男（日田市立博物館館長）

調査担当 土居 和幸（同学芸員）

発掘作業員 麻生ヨシ子、浴口ミツエ、石松 利則、笠原 国昭、笠原 久松、藤田エイ子、
福田キクエ、福田 光美、門司 誠司、森山 松雄、山崎 友行、吉富 里次、
吉富 己吉、吉富マツ子

平成14・15年度（2002・2003年）／整理・報告書作成

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 後藤 元晴（日田市教育委員会教育長）

調査統括 後藤 清（同文化課長）

調査事務 田中 伸幸（同文化課文化財係長兼埋蔵文化財係長）～平成15年3月31日
佐藤 晃（同文化課主幹兼埋蔵文化財係長）平成15年4月1日～
園田恭一郎（同文化課主査）

報告書担当 土居 和幸（同文化課主査）

整理作業員 石田紀代子 ～平成15年3月31日

製図担当 藤野 美音（同文化課調査補助員）

II II 遺跡の立地と環境

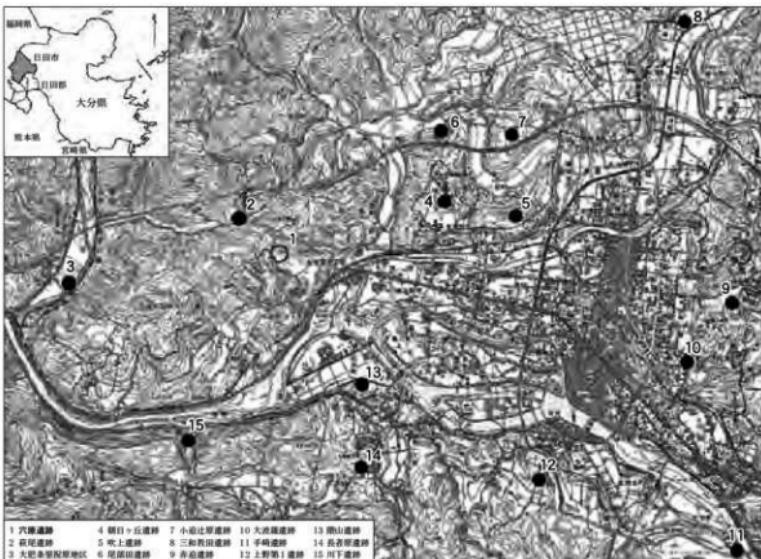
穴原遺跡は日田市西部の標高約175～200mの山上に位置する。遺跡のあるこの一帯は日田盆地の西側縁辺部にあたり、盆地内部の沖積地とは比高差約120m前後を測る。このため、遺跡からは日田盆地内を望むことができる。遺跡西側は標高が下っており、標高約170mの場所はやや平坦な地形をなしている。また、すぐ南側には筑後川が西流しており、川伝いに西へ2kmほど向れば夜明地域に、さらに西へ下ると県境を越えて杷木・朝倉などの福岡県へと通じている。さらに東側にはかつて江戸時代の石疊道が存在し、文字通り福岡地域へと抜ける交通ルート上にあたる。

日田盆地内の縄文時代の遺跡は近年の圃場整備事業等に伴う発掘調査によって増加傾向にある。早期の遺跡としては長者原遺跡（14）で押型文土器が多数採集されており、さらに大部遺跡、石ヶ迫遺跡、上野第1遺跡（12）ではこの時期の集石遺構が発掘されている。

また前期の遺跡には大肥条里下河内地地区があり、集石遺構や土坑が調査されている。

後期の遺跡としては川下遺跡（15）が知られているが、本格的な調査にまで至っていない。手崎遺跡（11）では西平式期、葛原遺跡では三万田式期、尾部田遺跡（6）や求来里平島遺跡C地区では御領式や大石式の竪穴住居がそれぞれ発掘されている。このほか、大肥条里祝原地区（3）では集石遺構や土坑、大肥条里吉竹地区でも土坑が調査され、牧原遺跡や三和教田遺跡C地点（8）、隈山遺跡（13）などでは土偶が発見されている。

晩期の遺跡としては森ノ元遺跡で前半代の埋甕、石ヶ迫遺跡や有田塚ヶ原遺跡などでは陥穴遺構が調査されているほか、赤迫遺跡（9）でも包含層が確認されている。



第1図 日田市内周辺の縄文遺跡分布図 (1/50,000)

III 調査の内容

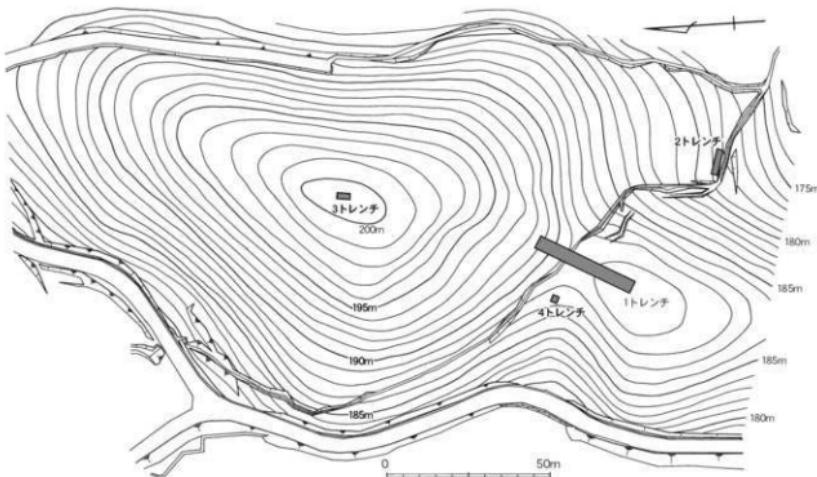
1. 調査の概要 (第2図)

今回の調査では対象地に4本のトレンチを設定した。1トレンチは最も平坦な場所にあたり、試掘調査区を拡張するように設定した。このトレンチでは遺物の出土が目立ったため、発掘調査では4m×32mの調査区とした。2トレンチは1トレンチ南側の斜面部に設定した。このトレンチの南側には平坦な台地が展開することから、遺構の存在も考慮して対象地の範囲ぎりぎりに2m×4mの調査区とした。3トレンチは1トレンチ北側の対象地の最も高い場所に設定した。平坦な部分が少なく、2m×8mの調査区とした。4トレンチは1トレンチの西側斜面部に設定した。1トレンチでの遺物の出土が目立ち、このトレンチでも遺物の量が多ければ拡張する予定で2m×2mの調査区とした。これらの調査区のうち、1トレンチからはまとまった遺物の出土が見られたが、その他のトレンチでは遺物の出土はみられたもののその出土量は少なかった。調査面積は156Vである。

なお、調査中には遺物を狙うカラスによって遺物が散乱する事態も生じたため、原位置を離れた遺物についてはトレンチごとの一括資料扱いとした。

2. 基本層序

この遺跡での層位は、トレンチによってはやや異なるが、概ね次のような堆積を基本とする。V層は表土層である。各トレンチとも10~20cm程度と浅い。V層は黒色土層である。この土層は全てのトレンチに見られるのではなく、2トレンチにのみ認められた。V層は茶褐色土層である。この土層は全てのトレンチで確認されたが、調査区によっては明るさが異なっていたが、土質が同じで遺物や風化小礫を含むことなどから同一層として捉えた。V層は灰褐色土層である。この土層も2トレンチでしか確認していない。V層は風化礫層。地山である。



第2図 トレンチ配置図 (1/1500)

3. 1トレンチの調査（第3・4図、図版1）

このトレンチでの層位はV層→V層→V層の順に堆積が認められ、南北側の斜面部では薄いV層下にV層がすぐに顔を出す状況であった。遺物はV層からまとまって出土しており、その分布はトレンチ中央から西側を中心とする範囲である。トレンチの東側では遺物の出土が見られなかった。また、V層中には遺物のほかにも拳大の地山風化礫が認められ、なかには火熱を受けた石もあるなど炉跡が存在していた可能性がある。

遺物は縄文土器片が25点ほど出土しているが、大半は石器で総数約430点を数える。縄文土器は図示した以外は磨耗が著しく、部位が判明する資料は見当たらない。石器はその9割以上が1V前後の剥片や碎片である。なお、周辺から須恵器片や土師器甕の破片などが採集されている。

出土遺物（第7図1、第8図1～4、6～15、17・18、写真図版2）

第7図1は深鉢の底部であろうか。平底をなす。磨耗がひどく、調整は不明である。胎土に金雲母を含むことから搬入品であろう。

石器は欠損品を含めて石鏃13点、二次加工剥片8点、石核2点、石錐1点、使用痕剥片1点などが出土しており、主なものを図示する。1は石鏃の先端部で、両面から丁寧な加工が施されている。2は石鏃の先端部で、両面から丁寧な加工が施されている。3は加工の状況から石鏃の脚部付近と考えられる。4は石鏃の脚部と考えられる。先端がやや丸みを帯びており、両面から丁寧な加工が施されている。6は石鏃で、正三角形に近い形態をなし、基部の抉りは浅い。両面とも丁寧な加工が施されている。先端部を欠く。7はやや不定形な剥片をそのまま素材とした剥片鏃である。加工は側縁部にわざかに見られる程度である。8は石鏃でやや不定形の剥片を素材に、先端部から側縁部に加工が施されている。基部の抉り部分には打面を残す。9は石鏃で両面ともに丁寧な加工が施されている。脚部がそれぞれ欠損している。10は石鏃で両面とも丁寧な加工が施されている。一方の脚部を欠く。11は比較的スマートな石鏃で、先端部と脚部を欠く。加工は両面とも丁寧に施されている。12の石鏃は基部が直線的で、先端部を欠く。やや厚みがあり、両面から丁寧な加工が施されている。13は二次加工剥片で、横長剥片の一側縁にボジ面側から加工が施されている。ネガ面側には自然面を残す。14は二次加工剥片で、横長剥片の打面側にプランティングに似た加工が両面から施されている。15は一側縁に交互剥離が施されている。二次加工剥片としたが、石鏃等の製作途中での欠損品であろうか。17は石錐と考えられる。先端部に両面からの丁寧な加工が施されている。18は小型の石核で、素材のほぼ半分を利用している。

4. 2トレンチの調査（第3・5図、図版1）

このトレンチでの層位はV層～V層の順に堆積が認められたが、東側ではV層下にV層が堆積していた。遺物はV層を中心にその前後のV・V層から出土しており、その分布はトレンチ西側を中心とする範囲であるが、その量は少ない。トレンチの東側では遺物の出土が見られなかった。V～V層中には風化礫が認められた。

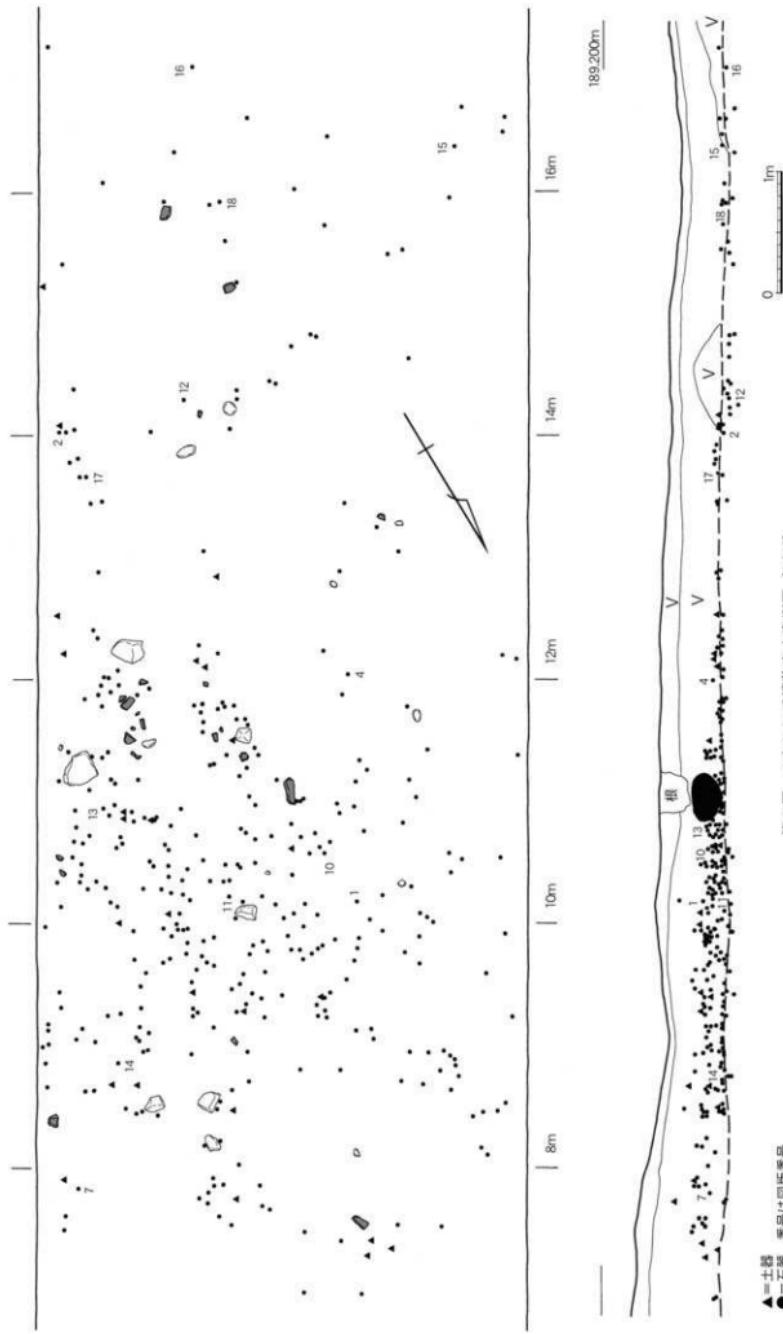
遺物は縄文土器小片などが3点出土しているが、時期の明確な資料はない。このほかに、黒曜石、チャート、安山岩製の剥片が出土している。

出土遺物（第7図2、図版2）

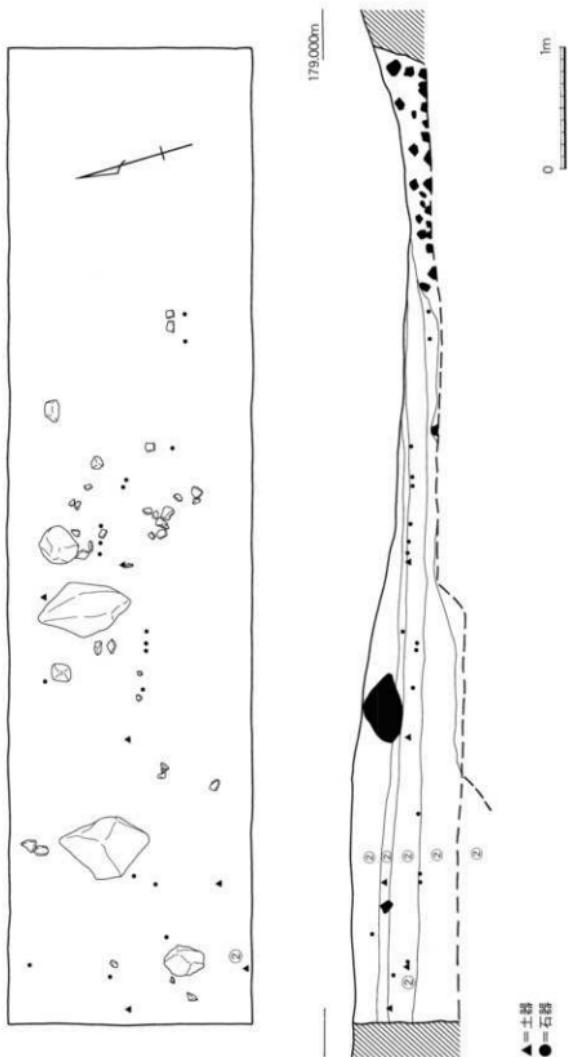
第7図2は縄文土器の底部で、「ハ」状に外に張り出す。磨耗がひどく、調整は不明である。

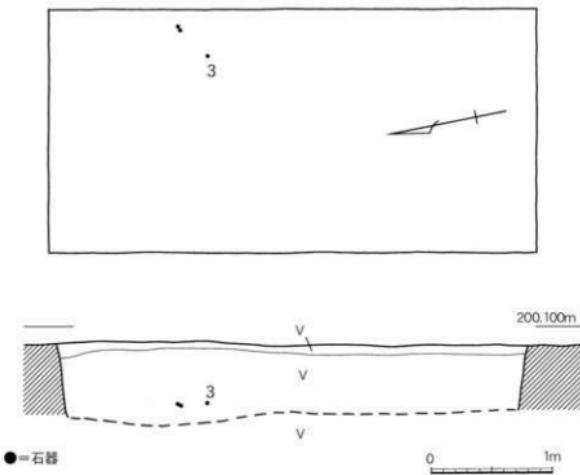
第3図 1トレンチ遺物出土実測図 (1/40)

▲=土器
●=石器 番号は図版番号
※トーンは鉄石

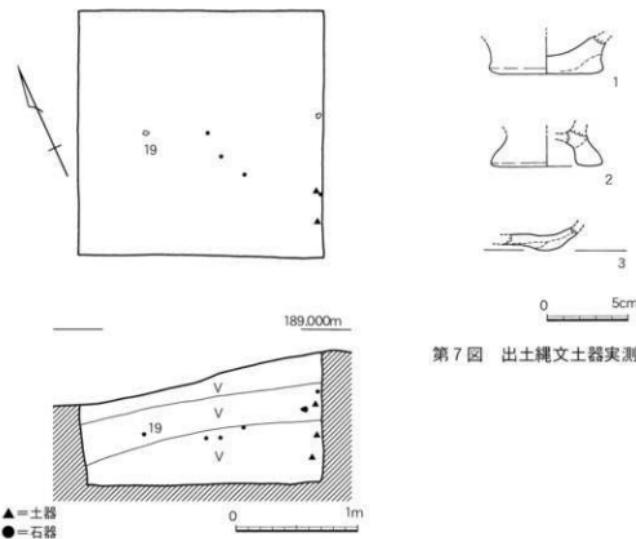


第4図 2トレンチ遺物出土実測図 (1/40)



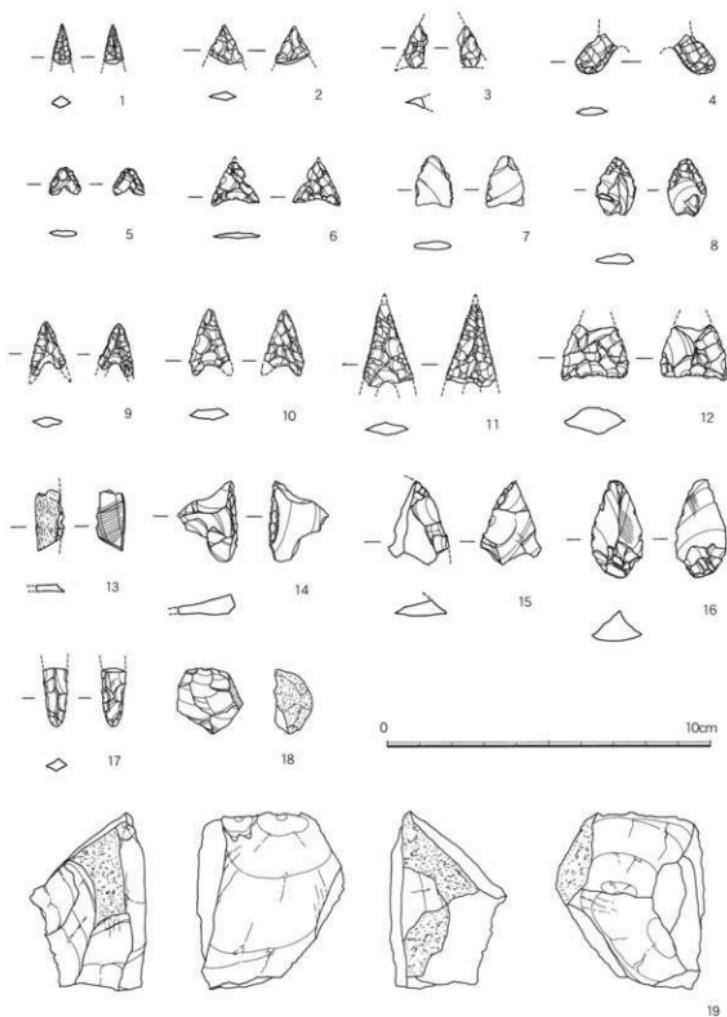


第5図 2トレンチ遺物出土実測図 (1/40)



第6図 4トレンチ遺物出土実測図 (1/40)

第7図 出土縄文土器実測図 (1/3)



第8図 出土石器実測図 (2/3)

5. 3 トレンチの調査（第3・6図・図版1）

このトレンチでの層位はV層→V層→V層の順に堆積が認められ、遺物はV層から出土した。遺物の量は少なく、石器が3点と縄文土器が1点出土している。

出土遺物（第7図3、第8図16、図版1・2）

第7図3は縄文土器の底部である。第8図16は二次加工剥片である。縦長剥片を素材とし、打面部のネガ面付近に丁寧な加工が施されている。黒曜石製。

6. 4 トレンチの調査（第3・7図・図版1）

このトレンチでの層位はV層→V層→V層の順に堆積が認められた。遺物はV層から出土しているが、その量は少ない。土器は縄文土器が3点出土しているが、磨耗がひどく時期判断できない。このほか、土師器の裏片が採集されている。

出土遺物（第8図19、図版2）

第8図19は拳大の安山岩を利用した石核で、4面にわたって剥離痕跡が認められる。部分的に自然面が残る。

7. 表探遺物（第8図5、図版2）

第8図5は1V未満の小型の石鎌で、両側縁部に荒い加工が施されている。先端部は丸みを帯びている。

IVIVまとめ

今回の調査では縄文土器や石器を含む包含層（V層）を確認した。この包含層については各トレンチに共通して認められ、量の多少はあるものの全てのトレンチから遺物は出土している。この包含層の時期については、各トレンチから出土した土器の量が少なく、明確な時期を判断する資料としては乏しいが、唯一実測可能な土器を見てみると、まず1トレンチ出土の深鉢の底部（第7図1）は円盤張付状の技法により成形されており、さらに2トレンチの底部（第7図2）は裾部が「八」字状に開く特徴を有している。^{注1)}こうした特徴の土器は市内では手崎遺跡、福岡県では甘木市柿原V層^{注2)}、縄文遺跡や金場遺跡などで出土しており、縄文時代晩期に比定されている。1トレンチで小型の石鎌や剥片鎌が認められることをも考慮すると、本遺跡の土器を含めた包含層（V層）はこの時期の所産と考えてよさそうである。晩期のどのあたりに位置づけられるかについてははっきりとしないが、先の手崎遺跡の土器をまとめた坂本氏に従えば晩期中葉以降となろう。

さて、1トレンチからは約350点の石器が出土しているが、その9割が剥片や碎片であり、製品はほとんど見られない。これらの石材については黒曜石、安山岩、チャートなどの原石が使われており、黒曜石が9割近くを占め、安山岩やチャートなど他の石材の使用頻度は低い。黒曜石もいくつかの産地の原石が使われており、腰岳産が最も比率が高く、姫島産が1割弱のほか阿蘇・大山産の黒曜石も散見される。

以上、調査結果を簡単にまとめたが、各トレンチの遺物の出土状況は1トレンチの平坦な場所において遺物が集中したほかは、山頂や山裾、斜面部では遺物の出土量は極端に少なく、1トレンチ

での遺物の大半は剥片や碎片といった残り屑であり、この場所で石器製作が行なわれたことを物語っている。それにしても土器の量や石器製品の少なさ、さらには周辺に旧石器時代から縄文時代の遺物が多く採集されている萩尾遺跡での立地と比較すると、この遺跡での生活は不適地といえる。1トレンチ出土の底部（第7図1）は在地土器ではなく搬入品であり、東へ下れば盆地へ、西に一山超えれば大肥川、さらに一山超えれば筑後平野へと抜けるルート上有ることを勘案すると、この遺跡はキャンプサイト的な利用がされていたと推定される。

註

- 1) 田中裕介編『日田市高瀬遺跡群の調査2 手崎遺跡 大部遺跡』一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 大分県教育委員会 1998年
- 2) 中間研志編『柿原I 縄文遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告第37集 福岡県教育委員会 1995年
- 3) 中間研志編『金場遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告第54集 福岡県教育委員会 1999年
- 4) 註1と同じ

第1表 出土土器観察表

鉢団番号	区名	番号	層位	種別	器種	法量		調整		胎土	焼成	色調		備考
						口径	脚部径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	
第7図-1	1T	307	Ⅲ	縄文	深鉢	-	-	7.0	(2.2)	不明	不明	BGH	粗製 明茶褐色	明茶褐色
第7図-2	2T	4	Ⅲ	縄文	不明	-	-	(6.8)	(1.9)	不明	不明	ABCH	粗製 茶褐色	茶褐色
第7図-3	3T	表探	-	縄文	壺	-	-	-	(1.0)	不明	不明	ABCDEH	粗製 暗灰褐色	明灰褐色

法量の単位はⅢ () 書きは、残存と復原を表す。

胎土：A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 H砂粒

第2表 出土石器観察表

図版番号	トレンチ名	遺物番号	層位	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第8図-1	1トレンチ	106	Ⅲ 層	石鏃	黒曜石	(1.2)	(0.6)	(0.3)	(0.1)	
第8図-2	1トレンチ	311	Ⅲ 層	石鏃	黒曜石(姫島)	(1.2)	(0.9)	(0.3)	(0.2)	先端部のみ
第8図-3	1トレンチ	40	Ⅲ 層	石鏃	黒曜石	(1.3)	(0.6)	(0.4)	(0.1)	脚部のみ
第8図-4	1トレンチ	50	Ⅲ 層	石鏃	黒曜石	(0.9)	(0.9)	(0.3)	(0.8)	脚部のみ
第8図-5	表探	-	-	石鏃	黒曜石	1.0	0.5	0.3	0.1	
第8図-6	1トレンチ	一括	-	石鏃	黒曜石	1.1	1.4	0.2	0.3	
第8図-7	1トレンチ	284	Ⅲ 層	石鏃	サヌカイト	1.4	1.1	0.2	0.4	剥片鏃
第8図-8	1トレンチ	343	Ⅲ 層	石鏃	黒曜石	1.7	1.2	0.3	0.7	剥片鏃
第8図-9	1トレンチ	一括	-	石鏃	安山岩	1.2	1.0	0.4	0.3	
第8図-10	1トレンチ	112	Ⅲ 層	石鏃	黒曜石(姫島)	1.7	1.3	0.4	0.5	
第8図-11	1トレンチ	128	Ⅲ 層	石鏃	黒曜石	(2.5)	(1.5)	(0.5)	(1.2)	基部欠損
第8図-12	1トレンチ	32	Ⅲ 層	石鏃	チャート	(2.1)	2.0	(0.9)	2.5	先端部欠損
第8図-13	1トレンチ	333	Ⅲ 層	二次加工剥片	黒曜石	(1.7)	(0.9)	(0.3)	(0.5)	
第8図-14	1トレンチ	262	Ⅲ 層	二次加工剥片	黒曜石	(2.4)	(1.8)	(0.6)	(2.1)	
第8図-15	1トレンチ	12	Ⅲ 層	二次加工剥片	黒曜石	(2.3)	(1.9)	(0.5)	1.8	欠損品
第8図-16	3トレンチ	3	Ⅲ 層	二次加工剥片	黒曜石	3.0	1.6	1.0	3.0	
第8図-17	1トレンチ	28	Ⅲ 層	石錐	安山岩	(1.8)	(0.7)	(0.5)	0.5	脚部のみ
第8図-18	1トレンチ	18	Ⅲ 層	石核	黒曜石	2.0	2.0	1.1	4.6	自然面を残す
第8図-19	4トレンチ	1	Ⅲ 層	石核	安山岩	5.3	4.5	3.6	81.8	自然面を残す

※単位はⅢ () は現存長



⑧ 調査区から市街地を望む



⑧ 1 トレンチ全景（西から）



⑧ 1 トレンチ遺物出土状況（西から）



⑧ 1 トレンチ遺物出土状況（東から）



⑧ 2 トレンチ遠景（北から）



⑧ 2 トレンチ発掘状況（北から）

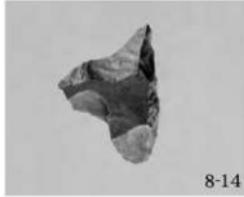
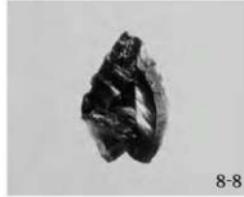
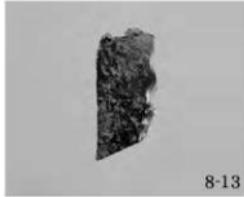
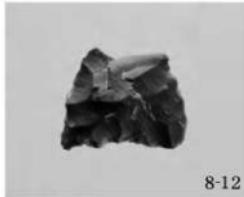
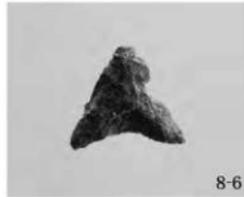
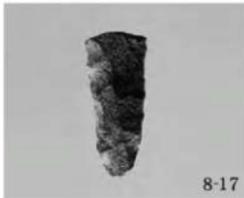
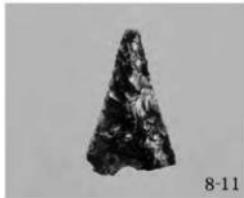
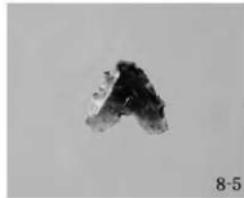
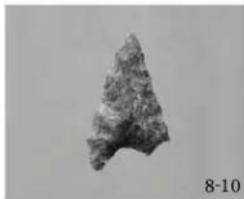
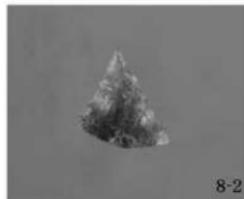
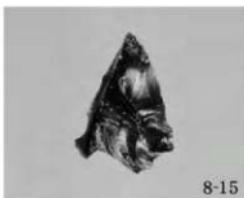
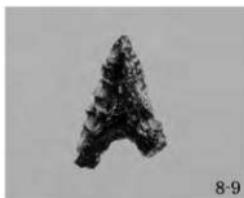


⑧ 3 トレンチ発掘状況（西から）



⑧ 4 トレンチ発掘状況（西から）

写真図版 2



報 告 書 抄 錄

ふりがな	あなばる
書名	穴原遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	43
編著者名	土居和幸
編集機関	日田市教育委員会文化課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2003年5月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
穴原遺跡	大分県日田市 大字友田字穴原 2483-1他	44204-6	651081	130°53'40"	33°19'	19860624 ~19860725	156m ²	スポーツ 広場建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
穴原遺跡	包含層	縄文時代		縄文土器 石器（石鏃、二次加工 剥片、石核など）	

